



戊辰記事

戊辰六月亦公神戶
記事
潜休

早稲田大学図書館
文書27
B 7



戊辰日記逸事

八月廿八日 神戸出帆横濱向

朝外國事務役所長兼横濱航海免狀清規二年者東方
潜伏之身公然役所出帆之身一是隱也萬一有礙
と悔、心得夫上杉伊達商家征討に伊初以是七珠一浪
士横濱と警視し航海免狀、兵庫縣出帆、伊初傳輔
判事申出作大御列席是、可也後申、白不得出帆
願書差出在也

奉願口上覺

私儀今般要用有之米國二工ヨ一船工便乞横

濱表正四能越度毒好候仍為航海御免狀御
下渡被下候標此首奉願矣以上

八月廿八日

外國事務御役所

何禮之助家兼
過 當長三藏

右之通願書並出交伊藤知事直子受取自今
何禮之助家兼過 當長三藏 航海御免狀
中島判子

何禮之助家兼
過 當長三藏

右者朱國ニヨリ船工改便乘橫濱上陸差免

候事

辰八月廿八日

兵庫縣 裁判所

伊藤知事之時、着照思羽布俵子純子之袴也、
金時繪之太刀布、華麗也、格飾多、余も思
洋服を着ず、證書も多、又、歸舎類川保之印、事務
役所上灘東市、書状、頼子遣、是、身、無
滞、差、出、吳、便、船、切、子、買、心、改、最、初、之、款
川、子、能、常、之、世、所、之、成、候、身、第、子、指、答、答、禮、子、系
以、與、出、勤、留、留、也、

養道僧兩人を荷物と因の作兵衛元七彼此因難
有宿主網屋在九衛門家族も水運留り成り為め
名跡も惜み涙を流し船中食物も乏しく萬事世
詠詠吳大仕在り畢竟養道僧の徳を信
有り

午後五時半葉船穂波三位卿と葉船浪花丸軍
務局の頭取等込昨夜神戸出帆也

三日月号の葉利加國の飛脚船を蕙藻利製造の後
大津船場停り九字出帆大車輪洪瀾を倒
翻り扱及て感歎多辭甲板佇立天風海濤

之中^{神戶}神戶港と開敷日東揚子河と長瀬橋を
神戶夜泊船の燈火暗中掃羅星の如く點
出り開港場繁華の如く美景ありしと輪車轉
濤一瞬の如く微茫隱見者冥途の影滅
て遠く想出たり計りあり夜半船上徘徊星象
を港の方向と窺星光海波を射り明珠飛如
此宵の夜は安眠也

廿九日晴 過紀州灘遠州灘
天明紀州地方より寄附隠海軍の船半次大島
山梨と北面の船を留り

後、流り
ハ花と改名

九時朝飯以傳ふ穂波三位卿ハ上寺の椅子坐
白食中未忍人伴食す余ハ巻道僧と對食す
茹子可移ハ凶報ヲ接せしハニヨロリ号飛脚船ハ
夜江戸より徳川龜之助殿ヲ載セ駿府ハ護送一坂
神戶系リ枳ノ横濱ヨリサニライシ号着船横濱
末状ハ去リ十九日開陽回天ヲ付シ七艘横濱有晚
走ケ又西軍ハ河川ヲ追軍平澤ヲ由所攻メ
ハ二本松後城會來初島表出共ニ
船上秘細ハ審不料品川沖之六月中一別ニ大江

丸船將木林保阿波連シ与人身ヲ惜然目諸

好同際を以て余ノ之を其の密談也

六月七日品川沖ヲ去矣君根本殿ハ協議ニ故
傑ニ舊敵老坂美力在田共老命ヲ他隠リ
以テ載セテ常州平澤ヨリ寄セ付不回官軍ニ
車轉勢ヲ連シ此時勇士艦他ニ艘早ク平澤ニ
至リ我大江山ヲ要シ打砲我艦艦子大砲一川共
坂在田ヲ上陸為汝汝ノ石炭ヲ奪外ハ此力
致人及互都ノ婦女子ヲ載セヨ平澤ヲ脱去ニ
魚ノ口ヲ切ル仙傳ニ由リ去リ坂大妻ヲ待合セ
陸奥守飯沼前出テ海陸大軍攻進ニ望ミ

建議一陸奥守殿坂大守之命一曰大足帥九為
五千之兵と率じ一の節刀を授て自ら岩根と
お馬一の坂を送るに自守の大江九九大足帥
仕掛を再分要得る事と并中と接攻中の事と
立て一の何れ園の舊君阿波侯中未也証討
の事と命ありてお陣とつと余のしと作幕大
江九九船將を為し一の阿波備方論を分脱獨と
我志を遂人れを本他中一の舊の事とお陣と
の義を於るらと引く到底志と成仍の陸奥
守を陳情しと船將を辭せ陸奥守殿の事と

為るに太刀一腰黄金三百兩と賜り月日も
是義の感激一の此とて、空島大田の是は建
白の指無の事と一の消息仍の京根の動靜と探
知し白密告一の報息一の助とありて一の仙臺を辭
し高を京根と探して今何處にありて、
予此苦の凶報と接し心腹の事と涙を
夕陽志摩の戸端岬と相廻り考遠洋の風波
甚穩の事と遠僧華氣器械と恒觀一の驚愕予
仍の詩を賦一の未也人の贈
眼孔小於豆壯觀唯耐驚火輪翻雪浪快蹴大洋行

夜通辨稻垣藤三郎來話中川宮加州紀州因備
茅黨與相顯かし

養道僧突然崩騰余の患危急之事と云ふ如
く水邊危急あり漏地より船中初山為家死
死部系系止升る七親も早く救助せんが
顔色如土を根根あり一方余も謹慎は船
殊更戒心を不用安者あり説くも亦多少
入余仍何れか不安死候事と疑惑ありしに
流しやしと云ふ君の面を平生の如からず
中自編の廣道あり候りて此の病の者也

とていしと云ふ東國の軍退福も滅の危急候七に候に
本もすく予共の日に占し百是山之後野野一肝膽
と挫く七ある勝報と得るも己祈念もあふは敗
少と得る笑み我身辭焦熱喜如一百の辛報
水泡屋すり中徳しよ中道僧忽ち在場一為類
名如常 此中余の未は人等と捕るべきと就傳
難ありんと我身の運及と此に始あり其り安心
終相候云ふと慮む宿願持とりて余の怖恐の
者あり

濱殿海軍所之櫻井貞茂周旋之晚食政一
古庄植野竹流昔打連湖留河岸其處
舟宿の到りて其過に鏑湯に入流政境を以て
入流を身辭爽快多かり居根舟を以て
物も足漕が三人打流古庄曰く此處に官軍
見張所多し兎角危険多し宮島尺に舟を遊
漕川に岐橋の到り踪跡を絶たず岐橋を遊世
妙あり極那日ゆゑ岐橋を難多し入込に對
目之難多かり第一事あり六甲名に尺に大事
と流るべし我楽切角は地を日行し何と云ふん長

曰く夫の非常の過慮なり好異遊里の如く
あり一多の遊異を為す何れ先陳め人却る
舟宿多の淵踏きより歎然海川の宿り
竹添與人の言を依違の判断せず然れ
奮然と決り旨を古に之を知己と信す
積年の学友と有限ありし多の輩初に
一身の大事を顧みず我一己の私慾を遂
げし客多一身の大事の國家の大事あり
は歎然尾國家の思ふ人なり今舟中を果
し命を為すべしを極野の朱勅の賜を
手懸

けに在り迫りたり古を斬る斬るべしを謝
し祈り
竹添思ふ面を變じし多の客多舟中を切
迫り余を力に交りて極野を抑留の之を
削り白く今も果し川行方否の論あり
と皆を誠し一身を思ふの誠者なり
目前に危険を避りて上京の首尾を
務め今此安き也舟中及舟の邊あり
あれは危し目前に騷動ありて誠し
也物多あり上京の大事なり是を
且詔
君の御知を多しと果し大事七

廢先何事与若心術之非也他日之
信之也其誠之判斷也但世之身之宿好
吳之申漢安虎平太遷然其白和
汝地之也其此也之也其也
根舟之流教光之三丁仲之漕者一徹常
其折之也第物舟中之救之苦多也
凡舟人之遣之權之權之幕之幕之
買人之舟中之也

植野虎平夫之明居九年終末神風連城
起車之也其也其也其也其也其也其也

と士とあり 二四年三月十七日とあり

謝を乞ふ西城を以て返ししに仙基来りて已に謝
罪降伏せしと説あり余此子とていふに
信すべしと服部後援元
筑前守の宅 難う搦し前島来りて
と信じし又肥後之藩古庄加川安藤源之助堀田
慎之元著お會し奥羽事恒疎詰最中あり
在る余の向し無禮と揚言し之曰く米澤腰
拔り奥羽連衡の坐元とて諸藩を回す
徳の好月と我の支取強く徳藩の先七郎伏せ
足下何の面目ありと余誰事と對すといはる暴
慢あり余勃然と腹を打ち罵て曰く腰拔を

未澤と謂ふ事いまだ未澤謝罪の真柄
と知らざりし事と指し之腰拔り謂ふ事
予の奥羽征伐に代りて敵に山河を踏
蹴して遂に千代萬代と為し之に列藩と建白
の上奏あり但し其の所以を以て精神示す所は
捷なり但し其の所以を以て謝罪の百戦力彈を以
罪り又謝罪すべき理由の傍會し之謝罪を
し又之腰拔りし也余の去國以來之知精
神の如きは予の精神の如きは且下輩の聲
動あり并に肥後藩の聲動あり助め且下極野

也藩者之肥前前出精意の流能盡者凡そ其
念し奥羽の事は先づ但し其の役人の面會
曰く予輩三人の公族長岡良の助の内命を以て
奥羽の形勢を察し之先づ諸君を以て審み之
頼末を以てし之れ奥羽の藩に九條法橋使の
對し之御家保海軍の事大山世良吉秀海軍
動あり奥羽人心擾亂の事九條の安保海軍
狀知りし事海軍の事情を以て建白使者とあり
頼末を以てし之れ御家保海軍の連衡を以て
し之御家保海軍の事情を以て建白使者とあり

義舉を賛成説の九之肥前藩士延の言以ん
る道に肥前藩の刊切り此に山米使臣其の
上京の長国長助の入説の奥の賛成せぬ
建白書折の言るを於て肥前も亦其のべ
と三人の意見の紛争ありすは而も江戸
品川の着目も及んで仙米使臣の勤辯を聞かぬ
ち西条指の馳走し長国を河入説せし肥前
藩の河内進退せぬは流に漢し雲煙飛
駕の如く今日奥の飛情を對し肥前藩
の一運功ありしや字くは年一却の是下等

乃肥後藩も腰拔せしありき也古に其美
の舟の古名曰く美品川上流故肥後藩帥
長原察世の為事指漢井新九郎を始のし
我亦を嫌疑し或は捕縛する物あり江戸の藩
諸君の心ありす直に早駕を西条指の馳
走し長國の河内と奥の義舉を得命し其
旨の上奏ありんこと其陳述す終る遷改江戸
藩の早の意の奥の利藩の奏の状に字を不
解の事し故に唯口出の弁を以て人々のも
周旋の事ありり其の難を森達徳等の

唐一長國の軍防官の命を以て江戸に東下せり
禁直の肥後を歸り百方論議漸く移接の兵
と名す運のの成再心江戸に成りしに上杉謝罪
の事とて江戸に於て改め満ちる今正不事
為北に北に漸く上奏あり是より龍口為
即の到長國の親家と建白の状況を以て且
此地の於て一通の到存とて任おりの進達
の之を長國に法願とて来りし物とて
と辭し第の龍口肥後即ち古に古藤城の
昔の共の馳名なり

龍口即の如

此遷多まて極昌しゆ筆

八月六日米沢城下之形勢二本松村上村松
之三原落城故流寓城下之混雜大方切字
七日米澤を立て関之驛を向う綱木之峠に
掛り交付交をも林昌之助之軍隊を連ふ仍
全軍米澤城下にと引戻す因分以て林
昌三人を真し白仙之趣を往共の湯之原を
立し林之會津を物多たつ一決せり

八日米沢を及湯之原に泊兵士二井宿の法
十日向原城下を看し出る勢。輪王寺宮東宮

尾解之故難を奥羽の僻計に出し此の杜を以て海見
三日岩沼に着し伊達父子慶邦は出陣せま
を以て討面す

十九日仙臺より白舟の輪王寺宮へ出
二十日米澤城下より再び着す此より次會津
國境將軍山敷を敵猪苗邊へ近付た由
風説ありしが此相相又南より方より光焰
遙るる故に其の最も會城へ馳りたりんと
二十日米澤出でて細木河原に泊る
會津中澤郡より進軍松原の様子を以て

將軍山敷を猪苗代と迫らんとす此日米澤
小森澤隊花合ありしが會を起し此日米
澤其の福を以て猪苗代は敵已に城
下より退き所を放火し今今城に我軍を
徳に手物ありしを去りて城難く一不
如徳に危地を到りて空を兵に費さんより
改め必勝の利を求むらんを以て説諭を然切
なりとて生口岩城平退きたり會を存せし
共先期に於て今之を危急を以て不敵な
る本意ありしを予知し會を起し人々
小森澤氏再三利害を説き諒めけり今會

越中を止り先の米沢藩に討ち入りて
下と一決せり

二高の綱木と打ち合ふ輪王寺守護し生
死の法蓮子にせり大野方小伊能五物
あり急き白石の越きし事と周旋へまじりて
命を乞ふ其の輪王寺執事高見王院破正
面過し予う東志と出へ官守護せらるる
と求めけり石の諾

廿九日竹中丹後若松に危急と逃せ白石
東う福島と衝て會合し之に接せらるる也

初

九月四日松本に泉の山を面合す

九月中旬米澤降伏奥羽一國降伏

説者曰く

九月二十日徳川の脱臣悉く搦けし能海
し白再吳を討て一殺す

予於是湖深に浮心と為す

二十日ハ隠林香院より謹言す

此一作は之を徳川藩に討ち入りて
其の勢を衰へしむるに功あり
其の勢を衰へしむるに功あり



